

いしづち

2023.3

MARCH

No.151



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



愛媛県建築士会70周年記念特集
建築と人新世(アントロポセン)
道後温泉の遊郭について(前編)

CONTENTS

1	愛媛県建築士会70周年記念特集 愛媛県建築士会70年の歴史と将来 愛媛県建築士会 歴代会長 歴代会長 回顧録 表彰者一覧 役員名簿(平成14年～令和4年) 2001年からの出来事(平成13年～令和4年)	愛媛県建築士会 会長 尾藤 淳…………① …………② 第10代会長 神八 達成…………③ 第13代会長 本田 壽…………④ 第14代会長 寺尾 保仁…………⑤ 第15代会長 赤根 良忠…………⑥ …………⑦ …………⑧ …………⑩
2	建築と人新世(アントロポセン)	道上壮/VuA…………⑭
3	道後温泉の遊郭について(前編)	一級建築士 野本 健 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹…………⑯
4	世界建築紀行	タージマハールへのインド旅(ジャイプル編) 西予支部 松山 清…………⑳
5	委員会活動報告	愛媛の登録有形文化財「松山地方気象台」 文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和…………㉑ 古学堂見学会 文化財・まちづくり委員会 眞田井良子…………㉒ 女性委員会主催 暮らし+ (プラス)勉強会 クリスマスリース作りワークショップ開催報告 女性委員会 永井 由起…………㉓
6	支部報告	支部研修旅行 四国中央支部 稲村 聡…………㉔ 建築士の日の行事「建築模型を作ってみよう」 松山支部 青年・女性委員会 委員長 白石 学…………㉕
7	けんちくの輪	♪Any♪のサビを聴きながら読んでね。 松山支部 高橋健太郎…………㉖ 徒然に 八幡浜支部 原 政治…………㉗
8	お知らせ	令和5年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 事務局…………㉘

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



アクリル画

すいは こうげん
題：「翠波高原
(愛媛県四国中央市金砂町平野山)」
[表紙画について]
標高892mの翠波峰は、美しい翠が波
のようにたなびきます。春には黄金色の
菜の花、夏から初秋には可憐な早咲きコ
スモスの花で覆い尽くされます。
翠波峰からの360度の眺望は、瀬戸内
海の島々と四国山地の両方を見ることが
でき、4月中旬から5月中旬にはワシ
ントン桜の園のソメイヨシノや山桜、八重
桜も楽しむことができます。
(四国中央市観光協会HPより)

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞
(愛媛県建築士事務所協会主催)
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」
(新潮社)の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」収蔵される
2015～17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「飾リチエルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員/審査員

愛媛県建築士会70年の歴史と将来

70周年記念特集

1

愛媛県建築士会 会長 尾藤 淳一



建築士会は、令和4年2月に満70歳となりました。これまで本会が、社会に残してきた業績を振り返り、未来に向けてこれから何をなすべきなのかを考えるいい機会だと思います。

ただ私が入会したのは、平成4年のことで、30数年ほどしかたっていません。私一人がこの長い年月を語るのは無理だと思います、歴代の会長に会長在職中の思いや出来事などを語っていただく様、寄稿をお願いしました。

快くお引き受けいただいた第10代会長神八達成様、第13代会長本田壽様、第14代会長寺尾保仁様、第15代会長赤根良忠様ありがとうございました。第11代会長濱本貞雄様と第12代会長和田忠則様は、残念ながら鬼籍に入られています。私の青年委員長時代に様々なアドバイスを頂きましたので、今回語っていただけないのは残念ですが、ご遺志をしっかり受け継いでいきたいと思います。

そもそも私が70年の節目にこのような企画をしたかをお話する必要があると思います。実は、私が所属する別団体の60周年記念事業を2年ほど前から準備をしていました。準備を進める中で、建築士会は50周年記念誌を作ったけど、60周年は何もしていないな、70周年はいつだろう、周年行事は大変だけど会員相互に連携が深まるから是非やるべきだと思っていました。そして建築士会の70周年は令和4年度ということを知ったのは、会長に就任した後のことでした。近年コロナ渦ということで、活動が制限されて、事業を企画することすらできない日々が無為に過ぎていく中で、70周年という節目さえ気づかないうちに過ぎ去るところでした。

今、創立50周年記念誌を手にとっています。そこには昭和26年11月10日に開かれた設立総会での、設立趣意書が載っています。「前略……よって

我々は、愛媛県建築士会を設立し民法上の公益法人団体として発足し、ついには医師会弁護士会のように社会的に有力な権威ある団体の一つとなり得る様、育成発展せんことを希うものであります。……建築文化の向上と将又斯界のため貢献いたしたいと思うのであります。」そして初代後藤種一氏以降、崇高な理念のもと社会的地位の向上を目指して、年々活動や事業を増やしています。10周年、25周年を行い、30周年記念事業として、旧建築士会会館を建設すると勢いを増して、さらに数々の事業に取り組んでいるようです。50周年記念誌には、前代たちが歩んできた道とその進み方が、生き生きと表現されていました。そして今建築士会を預かる我々に進むべき道を示しているようでもあります。

私たちの斯界では、姉歯建築士構造計算書偽造事件以後、建築士の社会的信用度の回復がなかなか進まないことと建築士試験の厳格化などにより、受験者数や合格者数が伸び悩むとともに、会員数の減少にも歯止めがかかりません。そもそも今の時代には、個人情報保護法や新型コロナウイルスの呪縛に囚われ、何をやるのも面倒があったり、そもそもこれらを理由にやろうとしなかったりという風潮があり、世の中全体に停滞感が漂っています。このままですと未来の人たちから、あの時代の人たちはいったい何をしていたのだらうと蔑まれるかもしれません。いえいえ、私たちは旧会館の耐震不足を解消し、災害時の対策拠点となりうる新会館を建て、応急危険度判定士の養成を行い、南海地震発生時に貢献できるよう備えています。また歴史的価値のある建物を維持活用していくためにヘリテージマネージャー協議会を立ち上げ活動しております。ただ少し、活動資金に苦勞しているだけです。

私たちは建築士として社会に貢献していくことを通じて、社会的地位を確立していくことをこの70年の節目に改めて記し、次の75周年はたまた80周年に新しい記をつけていければ幸いに存じます。まずは歴代会長の思いを改めてご一読ください。

愛媛県建築士会 歴代会長

初代 後藤 種一



- 明治33年1月2日生
- 在任期間
昭和26年11月10日
～29年6月13日まで

2代 武智 幸文



- 明治36年3月5日生
- 在任期間
昭和29年6月14日
～39年4月14日まで

3代 本吉 弘



- 大正13年8月21日生
- 在任期間
昭和39年4月15日
～41年5月21日まで

4代 三井 達雄



- 昭和5年2月8日生
- 在任期間
昭和41年5月22日
～44年7月1日まで

5代 玉田 清



- 明治33年7月20日生
- 在任期間
昭和44年12月6日
～47年5月19日まで

6代 磯道 秀夫



- 明治41年9月23日生
- 在任期間
昭和47年5月20日
～51年5月14日まで

7代 川本 重次郎



- 大正3年3月5日生
- 在任期間
昭和51年5月15日
～53年6月9日まで

8代 日野 進



- 大正4年8月10日生
- 在任期間
昭和53年7月18日
～61年5月9日まで

9代 菅野 照夫



- 大正6年10月10日生
- 在任期間
昭和61年5月10日
～平成4年5月22日まで

10代 神八 達成



- 昭和6年11月3日生
- 在任期間
平成4年5月23日
～12年5月30日まで

11代 濱本 貞雄



- 昭和8年12月1日生
- 在任期間
平成12年5月31日
～平成18年5月31日

12代 和田 忠則



- 昭和18年10月23日生
- 在任期間
平成18年6月1日
～平成22年5月26日

13代 本田 壽



- 昭和22年11月10日生
- 在任期間
平成22年5月27日
～平成26年5月29日

14代 寺尾 保仁



- 昭和28年8月24日生
- 在任期間
平成26年5月30日
～平成30年6月6日

15代 赤根 良忠



- 昭和30年7月23日生
- 在任期間
平成30年6月7日
～令和4年6月14日

16代 尾藤 淳一



- 明昭和38年11月13日生
- 在任期間
令和4年6月15日～

歴代会長回顧録

歴代会長とその頃

平成6年第37回建築士会全国大会（愛媛大会）の主催を控え、準備のため全会員が精力的に取り組んでいた最中、平成3年9月、前会長の菅野会長が病のため療養されたことにより、会長から指名を受け会長代理として大会準備に取り組むこととなりました。

翌平成4年に会長に指名され就任し、平成6年10月には県下各支部の役員、会員の皆様のご協力により愛媛県県民文化会館において、全国から4,602名の建築士の参加のもと、愛媛大会を成功裏に終えることができました。

翌平成7年1月17日に、阪神淡路大（震度7）が発生しました。死者6,434名、家屋の全半壊249,180戸という戦後最悪の深刻な被害をもたらしました。愛媛県建築士会は震災翌日に役員会を開催し、被害調査の為、応急危険度判定士5名を直ちに現地へ派遣し、被災建物の調査に従事しました。調査に参加された5名の会員は交通機関その他電気水道の損壊した神戸の街を数日にわたり調査、診断しました。

また平成12年には新耐震基準が改正され、同時に住宅の品質確保の促進等に関する法律に基づく10年保証が開始となり、更には建築基準法の確認検査業務の民間開放に関する改正も行われました。

建築士会はこれら改正法の講習会の開催を県下3会場で行いました。これらの出来事と並行して愛媛県建築住宅課、建築士会連合会、住宅保証機構のご指導をいただき、愛媛県建築士事務所協会の協力のもと、平成12年に民間の確認検査機関

第10代会長 神八 達成

として、㈱愛媛建築住宅センターを設立しました。県民の皆様の安心安全な生活を第一に、建築物の安全確保と建築士の社会的地位の向上を目指して頑張っております。

私の8年間の任期中に大きな地震が発生しました。また第37回建築士会全国大会（愛媛大会）が開催され、法改正による確認検査機関の民間開放による㈱愛媛建築住宅センターの立上げもありました。大きく変化した時期でありましたが、愛媛県をはじめ、各特定行政庁、役員、会員の皆様のご指導とご協力により、無事に会長職を終えることができましたことを皆様に心から御礼申し上げます。



歴代会長回顧録

会長の想い出

第13代会長 本田 壽



私は愛媛県建築士会の第13代会長として平成22年に就任し、その後2期4年間会長職を務めさせていただきました。

4年間の思い出として、最初の平成22年度は建築士会をより一層活性化する事を考

て会員増強に取り組み、会員の協力を得て努力をいたしましたが、実数的には会員減になりました。建築士免許証を持っている人は全員建築士会に入会するべきだと思ってその後も会員増強に取り組みました。また、高校生を対象としたコンペ「建築甲子園」が実施され、2校の生徒さんが参加しました。建築士会も審査をしっかりとしなければと、大学の教授等に協力をお願いし、コンペの審査を行い全国大会において奨励賞を受賞されました。建築甲子園には毎年参加して全国優勝をしてほしいと思います。

平成23年度は、23年3月に東日本大震災があり、8月に大阪で開催予定の建築士会全国大会が中止になりました。大阪建築士会の方は非常に残念だったと思います。自然の大災害が起きた時に建築士会は何をすべきかがこの時に充分に理解できたのではないかと思います。その経験がその後の熊本地震や西日本大水害に生かされたのではないかと思います。愛媛県建築士会も応急危険度判定、木造住宅耐震診断等、愛媛県、各市町と協力して積極的に取り組みました。また、継続能力開発（CPD）制度や専攻建築士制度の社会的活用 of 積極的推進で、県、県内各市町に各支部長さんのご協力を得てお伺いをし、両制度の内容を説明して活用をお願いし、建築士会の活動を理解していただきました。重点施策である公益法人制度改革の推進については、平成22年度に設置された公益法人制度改革に伴う委員会・作業部会において公益社団法人定款の検討、作成及び愛媛県への協議を行いました。

平成24年度は、公益社団法人へ移行認定申請を重点施策として取り組みました。この事について会員の皆様そして公益法人の改革委員会、作業部会の方々には何度

も会議に出席して頂き、内容の検討を行い公益法人へ移行する事を最終決定して、愛媛県に申請を行い、平成25年3月19日に認定を受け、平成25年4月1日、公益社団法人愛媛県建築士会の設立登記が完了し正式に新法人として新たにスタートしました。新法人制度では、法人自らの創意工夫による運営が重視され、その前提として法人のセルフ・ガバナンス（内部統治）が重要で、今後は株式会社と同じように自分のところで責任を持って運営をしていくことになり、理事、監事の役割は格段に重要になり、責任もある事を考え建築士会活動を行いました。また、地域社会に貢献する事業として引火性溶剤を使用するドライクリーニング工場の実態調査や「建築士の日」の行事等会員の皆様が地域社会に入って活動されていたと思います。

平成25年度は4月1日から公益社団法人愛媛県建築士会として、地域貢献活動の推進、会員の増強の推進、建築士の資質の維持・向上、業務の進歩改善、継続能力開発（CPD）制度及び専攻建築士制度の推進等、今まで以上にしっかりと活動を行い、本会の定款による、県民の生命及び財産を建築物による災害から守るとともに建築に係る県民の利益の保護及び増進並びに建築文化の振興を図り、地域社会に貢献する事を目的としています。この事を考えてそれぞれの建築士会活動に生かされたと思います。また、建築士会は、建築士法に基づき建築士に対し業務に必要な知識及び技能の向上を図るための建築技術に関する研修を実施しなければならないことで、今までの講習会に加えて「実務者のための工事監理ガイドラインの手引き講習会」などを開催し建築士会活動を積極的に行いました。

終わりに、会長としての4年間、会員の皆様、役員の皆様、事務局の大西元局長さん、西岡さん、河野さんの支えがあったので会長を務めることが出来たと思います。改めて心からお礼を申し上げます、ありがとうございました。

「一人の百歩より
百人の一步を」

私が会長の頃

第14代会長 寺尾 保仁



私は第14代会長として、平成26年度から29年度まで就任致しました。前年度4月に公益社団法人としてスタートした最初の年でした。会の運営、新しい理事会の対応等全てが初めてで苦慮致しました。特に新法人としての各支部のあり方、決算の方法等で当時の大西局長 事務局員には大変苦勞をかけたと思います。公益法人に移行したメリットを出さなければ、と焦っていたことも思い出に残っております。大きな一歩を踏み出さなければいけない年となりましたが、今まで共に士会活動をしてきた会員の皆さんの協力を最大限に受ける会長職が始まりました。

会長1年目、なるべく多くの支部総会に参加したいと思い、可能な限り支部を回りました。県最東部からの会長で、やっぱり遠くてはと言われまいようにと本会の会は基より、会長として出席しなければいけない会は代理を立てず全て出席致しました。主催された方々からは、代理の方でもよかったのにと気を遣っていただきました。まずは前会長から受け継いだ事をやり通す一年でした。

平成27年度から会館建て替えの検討が始まりました。今後震災に見舞われた際、応急危険度判定や災害復旧を担わなければならない士会の本部建物が被害にあってはならないようにとの想いのもと、当初は耐震補強も視野に入れ改修を行う事を検討致しました。既存建物の耐震改修設計、見積りも行いました。現状借家人の事、予算の事、このままで改修補強する事は難しいという結論が出ました。次に現地を処分して移転する案も出ましたが、土地を更地にする為の費用、建設当時土地を提供して頂いたとの事情もあり、移転は適当でないとの結論が出ました。その間、神八名誉会長にも住宅センター移転新設建物の間借りの提案も頂きましたが、双方の事情がありせっかくのご提案も実現できませんでした。

いよいよ建て替えとなると、資金計画を立てなければなりません。借入、寄付については前会館の個人の方の債務の処理を検討し、融資については伊予銀行、愛媛銀行二行の協調融資となりました。寄付債務については会

員・企業始め事務所協会様到大変お世話になりました。また新会館への入所を決めて頂きました事務所協会様とは、より一層の協力関係を深めて行かなければならないと思っております。いろいろ在りましたが、まずは案がまとまり、検討委員会の方々には感謝致しました。こうして平成30年総会において、この地に建て替えるという議決を頂く事になりました。皆さんから厳しい意見も頂きましたが、建物耐震問題は我々建築士が模範を示すべきとの結論を得て決定致しました。

平成28年は既存木造住宅の耐震改修の推進のため愛媛県からの要請もあり、建築士会から診断を行う建築士の派遣をする事になりました。派遣報酬は低価格で、建築士の皆様のボランティア精神で支えられて今日まで続けられております。

この年発生しました熊本地震に際しましては、県の要請で応急危険度判定士10名を派遣致しました。本県からの派遣は阪神淡路・芸予と3件目、応急派遣診断の講習も行っており参加者も比較的早く確保できました。参加頂いた方々に感謝致します。この功に際しまして国土交通省、愛媛県から感謝状を頂きました。

又この年から災害被災建築物や建築物の補修、文化財発掘等を行える技術を身に着けるべく、ヘリテージマネージャーの養成講座を開始致しました。私も2年掛けて取得致しました。今後の建築士の大切な業務になることと思っております。

平成29年度は会費の値上げを行いました。正会員12,000円から一挙に18,000円に値上げを行いました。値上げに伴い会員減少が懸念されましたが、活動の活発化を期待の方が勝り、行うこととなりました。

私の任期中は、色々と会員の皆様にご迷惑をかけ、ご協力をお願いする事が多くありました。それぞれが会員一人一人に直接影響を与える事ばかりで、皆様のご理解を頂いた事に大変感謝しております。役員を退任致しましても、折々の判断がやむを得ぬ判断だったと納得して頂けるよう、今後も士会活動を頑張りたいと思っております。特に会員の減少に対しては、士会の皆様のご厚意と意思を活動を通して実現できるよう、会員増強に協力したいと思っております。

歴代会長回顧録

歴代会長とその頃

第15代会長 赤根 良忠



第15代会長として在任期間を思い起こしてみました。

平成30年度通常総会において会長の任命を受け、令和3年度までの在任中には大きな事案がありました。

建築士会館の老朽・耐震不足により、寺尾前会長の頃より建て替えについて建設準備委員会で検討を重ね、

平成30年度総会決議により新会館建設に向けてスタートを切りました。建て替えにおいては、旧会館の取り壊しや事務局の仮事務所の移転をはじめ様々な事案がありましたが、関係各位の協力により順調に進み、令和元年5月に竣工することが出来ました。資金面では、将来の世代への負担が少しでも軽減できるよう建設への寄付金・貸付金等を募り、大勢の方にご協力をいただきました。「ご寄付者芳名録」を開いてみると、個人の会員のみならず多方面の建築関係の法人・団体様からご支援を頂いており、改めて感謝申し上げます。

平成30年7月には未曾有の集中豪雨により「西日本豪雨災害」が発災し、本県では特に南予地方での被害が大きく、豪雨による「住宅被害の補修・再建窓口」を吉田町に開設し、宇和島支部の会員さんが相談員を務めていただきました。被災された方の再建への支援に役立ったことと思います。

文化財まちづくり委員会が33年間にわたり調査・研究した活動記録や、県内外の著名な古建築を取り上げまとめた「愛媛の古建築を訪ねて」の冊子を発刊することができました。会員をはじめ建築関係団体へ販売、また第61回全国大会「さいたま大会」においても冊子を販売し、多くの方に手に取って頂くことが出来ました。また、同大会では青年委員会の地域実践活動発表に対し奨励賞を受賞するなど、各委員会活動も活発に行われました。

令和元年6月には「文化財まちづくり委員会」に対して都市計画法・建築基準法制定100周年記念として国際フォーラムで開催された記念式典において国土交通大臣より感謝状をいただきました。受賞には冊子「愛媛の古建築を訪ねて」が大きく貢献したものであると思います。また、この冊子は令和2年1月に第35回愛媛出版文化賞のうち第4部門の部門賞を受賞しました。社寺や古民家などの多数の調査物件の実測図があり、資料としての価値、建物に対する人々の思いが描写され、古建築の記録として未来に引き継ぐ意義を提起した良書として高く評価を頂きました。

令和2年3月には改正建築士法が施行され、建築士受験要件の実務経験を免許登録要件への変更がなされ、試験業務を受託している当会も対応に追われました。

また、4月には新型コロナウイルス緊急事態宣言が発令されるなど社会生活にも多大の影響を及ぼしました。令和2年度は中国四国ブロックの幹事県を担当することとなり、ブロック会議や中四国ブロック大会等、行事を取りまとめることになっていましたが、対面会議を一度も開催出来ず全てオンライン会議で幹事県の役は終わりました。また、2年前から会場確保、催しの物の手配等準備を進め、あとは開催当日を待つばかりのところまで来ていた「青年・女性中四国ブロック愛媛大会」も直前に中止をせざるを得ませんでした。スタッフの皆さんの大会に向けて頑張った苦勞が将来に役立つことと思います。

この頃は、新型コロナウイルスの蔓延に翻弄され、各種会議等々もオンライン又は書面で開催、通常総会も人数制限での開催とせざるを得ない事態でした。

このような状況の中で改正された建築士法での最初の建築士試験も、会場確保から間隔を開けた座席配置、試験監理員はもとより、受験者の検温・消毒・室内換気などの感染対策に気を使ったことを思い出します。

参加者登録もほぼ終えていた令和2年度第63回全国大会「広島大会」においても感染拡大防止のため翌年に順延となりました。広島士会実行委員会の苦渋の判断であったことを思い出します。翌年もコロナの蔓延が治まらず、連合会にて第63回建築士会全国大会「広島大会」として東京会場にて規模縮小し、オンライン併用の大会開催となりました。結局本来の形での広島大会は開かれることなく関係者は非常に残念であったことと思います。

しかし、この期間において、オンライン会議のメリットも少し見え始めたように思いました。対面との使い分けで活発な意見交換もできると思います。

懸案であったヘリテージマネージャー協議会も発足でき、受講修了者も増えてヘリテージマネージャーとして登録し今後の活躍を期待しています。

コロナ禍でも会報「いしづち」の発行は継続されました。委員の努力の賜物でしょう。

ただ、コロナ禍に振り回され建築士会行事が充分出来なかったことが残念です。令和2年度より2年間の連合会副会長としての任期中はほぼオンライン会議でした。退任の時に初めて対面会議が行われ、執行部役員が対面したのが最初で最後でもあり、一同顔を見合わせました。

建築士会の会長として2期4年務められたことを光栄に思います。取り巻く関係各位の皆様のご支援の賜物と感謝申し上げます。

表彰者一覧

叙勲・国家褒章・国土交通大臣表彰・県知事表彰
受賞者ほか(敬称略) (平成14年から令和4年まで)

1. 叙勲受章者

受賞年	叙勲	氏 名
平成14年	勲五等双光旭日章	神八 達成
平成15年	旭日双光章	大野 榮史
平成20年	旭日小綬章	濱本 貞雄

2. 国家褒章受章者

受賞年	国家褒章	氏 名
平成19年	黄綬褒章	高橋浩一郎
平成21年	黄綬褒章	羽田 快昇
平成22年	黄綬褒章	和田 忠則
平成25年	黄綬褒章	中岡 数夫
平成26年	黄綬褒章	本田 壽
平成28年	黄綬褒章	佐々木世希
平成29年	黄綬褒章	寺尾 保仁
令和元年	黄綬褒章	赤根 良忠
令和3年	黄綬褒章	武内 邦彦

3. 国土交通大臣表彰受賞者

受賞年	氏 名
平成19年	和田 忠則
平成23年	中岡 数夫
平成24年	本田 壽
平成26年	佐々木世希
平成27年	寺尾 保仁
平成29年	赤根 良忠
令和元年	武内 邦彦
令和3年	尾藤 淳一
令和3年	石丸真智子

4. 愛媛県知事表彰者

受賞年	氏 名
平成14年	武智 勝廣
平成15年	前上 恒
平成16年	豊田 治男
平成17年	三好 欣尚
平成18年	本田 壽
平成19年	中岡 数夫
平成21年	寺尾 保仁
平成22年	佐々木世希
平成23年	田中 羊子
平成24年	酒井 純孝
平成26年	赤根 良忠
平成27年	白石 春夫
平成28年	武内 邦彦
平成29年	石丸真智子
平成30年	濱本 泰久
令和元年	尾藤 淳一
令和2年	神田 孝一
令和3年	花岡 直樹

5. 都市計画法・建築基準法制定100周年記念感謝状

受賞年	氏 名	団体名
令和元年	高橋浩一郎	文化財・まちづくり委員会

6. 日本建築士会連合会表彰者受賞者

受賞年	氏 名	氏 名	氏 名	受賞年	氏 名	氏 名	氏 名
平成14年	三浦 恒三	二宮 初子	岡崎 伸亨	平成25年	渡邊 久夫	永井 明高	
平成15年	前上 恒			平成26年	佐伯 明	田中 羊子	
平成16年	三好 欣尚	本田 壽		平成27年	吉武 則幸	武内 邦彦	
平成17年	山内 昭			平成28年	藤井 周治	中 紘三	
平成18年	高松 昭二			平成29年	此上 照彦	石丸真智子	
平成19年	寺尾 保仁	中岡 数夫		平成30年	尾藤 淳一	大野 順作	西浦 郁子
平成20年	白石 俊彦	小松 捷		令和元年	大上 恵子	木村 久司	首藤 忠夫
平成21年	佐々木世希	山口 洋三		令和2年	井出 直	谷川 三郎	菅野 隆次
平成22年	宇佐美金正	酒井 純孝		令和3年	大西 勝秀	神田 孝一	大西 直子
平成23年	越智 省二	二宮 廣史		令和4年	小原 文子	花岡 直樹	松平 定真
平成24年	赤根 良忠	小泉 空士					

7. 日本建築士会連合会伝統的技能者表彰受賞者

受賞年	氏 名	受賞年	氏名	受賞年	氏名	受賞年	氏名
平成14年	山田 弘美	平成19年	菅野 博隆	平成24年	久門 哲夫	平成29年	近藤 要
平成15年	菊池壮三郎	平成20年	野本 茂	平成25年	永田 喜秋	平成30年	田中 弘良
平成16年	渡邊 玄房	平成21年	青木 章	平成26年	山本 文義	令和2年	菊池陽一郎
平成17年	長野 千城	平成22年	近藤 博昭	平成27年	曾我 藤夫	令和3年	濱田 成一
平成18年	戸田 勉	平成23年	兵藤 泰邦	平成28年	相原 誠則		

役員名簿(平成14年～令和4年)

役職	平成14～15年	平成16～17年	平成18～19年	平成20～21年	平成22～23年
名誉会長	神八達成	神八達成	神八達成 濱本貞雄	神八達成 濱本貞雄	神八達成 和田忠則
相談役	大野栄史 西野善明 福原史也	大野栄史 西野善明 福原史也	大野栄史 塩崎己年夫 前上恒	大野栄史 塩崎己年夫 前上恒	大野栄史 塩崎己年夫 前上恒 柿本五月
会長	濱本貞雄	濱本貞雄	和田忠則	和田忠則	本田壽
副会長	和田忠則 塩崎己年夫 前上恒	和田忠則 塩崎己年夫 前上恒	本田壽 寺尾保仁 柿本五月	寺尾保仁 本田壽 柿本五月 田中羊子	大野順作 酒井純孝 田中羊子 白石俊彦(H23.2退任) 赤根良忠(H23.2就任)
常務理事	真木政経 三好欣尚 尾崎亘宏	真木政経 三好欣尚 尾崎亘宏	清水浩 三好欣尚 尾崎亘宏	清水浩 三好欣尚 大西勝秀	寺尾保仁 橋本康示 大西勝秀
常任理事	寺尾保仁・此上照彦 山内昭・木村久司 白石浩・大野正志 菅野隆次・菊地青児 豊田治男	寺尾保仁・此上照彦 山内昭・木村久司 白石浩・大野正志 菅野隆次・和氣恵次 豊田治男	山内昭・宇佐美金正 木村久司・大野順作 大野正志・杉山博司 清家直・酒井純孝	越智省二・宇佐美金正 小笠原元・大野順作 白石俊彦・杉山博司 牧野淳・酒井純孝	尾藤淳一・越智省二 宇佐美金正・徳永光晴 佐伯明・隅田英久 神田孝一・杉山博司 松山清・古田剛 赤根良忠(H23.2月まで)
理事	佐々木ひろみ・越智省二 渡辺久夫・宇佐美金正 首藤忠夫・佐伯明 平田啓吾・松田敏彦 山口洋三・吉武則幸 赤根良忠・大野正勝 佐々木幸子・白石俊彦 高橋浩一郎・高松昭二 田中羊子・永井明高 中岡数夫・二宮廣史 羽田快昇・平岡英希 藤井周治・本田壽 小泉空士・鈴木欽次郎 糸野康・酒井純孝 二宮克志・尾藤淳一 安藤雅人・伊藤庫造 石丸真智子・大上恵子 葛原郁子	佐々木ひろみ・越智省二 渡辺久夫・宇佐美金正 首藤忠夫・大野順作 佐伯明・平田啓吾 松田敏彦・山口洋三 赤根良忠・大野正勝 佐々木幸子・白石俊彦 高橋浩一郎・高松昭二 田中羊子・永井明高 中岡数夫・二宮廣史 羽田快昇・藤井周治 本田壽・小泉空士 三瀬哲也・清水行雄 糸野康・酒井純孝 二宮克志・安藤雅人 鴻上八大・山内真一 西浦郁子・葛原郁子 小原文子	佐々木ひろみ・此上照彦 越智省二・渡辺久夫 黒川祐至・首藤忠夫 石丸真智子・近藤康雄 佐伯明・谷川三郎 山口洋三・赤根良忠 大上恵子・大野正勝 白石俊彦・高橋浩一郎 高松昭二・田中羊子 永井明高・中岡数夫 二宮廣史・羽田快昇 藤井周治・隅田英久 小泉空士・菅野隆次 清水行雄・糸野康 二宮克志・古田剛 氏間貴則・松平定真 柚山一利・葛原郁子 小原文子・藤本恵子	佐々木ひろみ・此上照彦 佐々木世希・渡辺久夫 太田淳一・首藤忠夫 石丸真智子・近藤康雄 佐伯明・谷川三郎 山口洋三・赤根良忠 井上竜治・大上恵子 葛原郁子・黒田利彦 佐々木幸子・武内邦彦 永井明高・中岡数夫 二宮廣史・花岡直樹 藤井周治・明関勉 三好欣尚・小泉空士 和田博・清水行雄 兵頭定幸・村藤勉 曾我真企・和田卓巳 松平定真・小原文子 大塚美由紀・田中明美	白石公成・渡辺久夫 太田淳一・首藤忠夫 石丸真智子・宇崎功二郎 谷川三郎・山口洋三 井上竜治・大上恵子 葛原郁子・黒田利彦 佐々木幸子・武内邦彦 永井明高・中岡数夫 二宮廣史・花岡直樹 藤井周治・明関勉 三好欣尚・小泉空士 和田博・清水行雄 兵頭定幸・村藤勉 曾我真企・和田卓巳 松平定真・小原文子 大塚美由紀・田中明美
監事	戒田順 佐々木世希 渡部隆	戒田順 佐々木世希 渡部隆	戒田順 佐々木世希 渡部隆	戒田順 藤縄洲二 西浦郁子	真鍋清 西浦郁子 大内寛司

平成24年	平成25年	平成26～27年	平成28～29年	平成30～令和元年	令和2～3年	令和4年
神八達成 和田忠則	神八達成 和田忠則	神八達成 和田忠則 本田壽	神八達成 和田忠則 本田壽	神八達成 和田忠則 寺尾保仁	神八達成 和田忠則 寺尾保仁	神八達成 寺尾保仁 赤根良忠
塩崎己年夫 前上恒	塩崎己年夫 前上恒	大野順作 田中羊子	大野順作 田中羊子	大野順作 田中羊子 酒井純孝	大野順作 田中羊子 酒井純孝	大野順作 田中羊子 酒井純孝 本田壽
本田 壽	本田壽	寺尾保仁	寺尾保仁	赤根良忠	赤根良忠	尾藤淳一
大野順作 赤根良忠 酒井純孝 西浦郁子	酒井純孝 寺尾保仁	酒井純孝 赤根良忠	酒井純孝 赤根良忠	尾藤淳一 松山清	尾藤淳一 松山清	松山清 花岡直樹
寺尾保仁 橋本康示 大西勝秀	赤根良忠 武内邦彦 大西勝秀	越智省二 武内邦彦 大西勝秀	越智省二 武内邦彦 大西勝秀	武内邦彦 神田孝一 大西勝秀	武内邦彦 神田孝一 大西勝秀(R3.6退任) 渡辺修(R3.6就任)	武内邦彦 宮崎秀俊 渡辺修
尾藤淳一・越智省二 宇佐美金正・徳永光晴 谷川三郎・武内邦彦 隅田英久・神田孝一 大森光昭・渡辺建文 古田剛						
白石公成・宮崎秀俊 太田淳一・首藤忠夫 石丸真智子・宇崎功二郎 山口洋三・井上竜治 大上恵子・葛原郁子 黒田利彦・小原文子 佐々木幸子・田中羊子 永井明高・中岡数夫 二宮廣史・花岡直樹 藤井周治・三好欣尚 小泉空士・和田博 三好静雄・兵頭定幸 村藤勉・森川晴喜 青陽孝昭・松本一師 田中明美・大塚美由紀 下元美恵	越智省二 太田淳一 徳永光晴 谷川三郎 神田孝一 大森光昭 渡辺建文 森川晴喜 西浦郁子 橋本康示	尾藤淳一 太田淳一 徳永光晴 谷川三郎 戸井義和 神田孝一 中川長次 稲田幹成 青陽孝昭 大塚美由紀 西浦郁子 橋本康示	尾藤淳一 元根衆三郎 石丸真智子 濱本浩 神田孝一 林一夫 亀岡俊治 松平定真 大塚美由紀 西浦郁子 橋本康示 花岡直樹	白石公成 元根衆三郎 曾我部準 花岡直樹 濱本浩 林一夫 水野日出夫 松平定真 近藤佳代 井上竜治 西浦郁子	白石公成 白川裕三 森昇平 花岡直樹 濱本浩 原政治 豊田恵介 和田崇 近藤佳代 井上竜治 小原文子	岸良一 越智忠美 森昇平 渡辺大記 神田孝一 原政治 與那原浩 和田崇 下元美恵 井上竜治 大塚美由紀 大西勝秀
真鍋清 佐伯明 明関勉	真鍋清 佐伯明 明関勉	真鍋清 白石公成 明関勉	真鍋清 烏谷陽一郎 豊田恵介	真鍋清(H31.2月退任) 森昇平 水口喜久美	元根衆三郎 水口喜久美	水口喜久美 藤井英樹

2001年からの出来事 (平成13年～令和4年)

西暦	世 相	愛媛県建築士会・建築界の動き	写 真
2001 (平成13年)	2月 実習船「えひめ丸」米原子力潜水艦と衝突、沈没 3月 芸予地震発生 (M6.7) 9月 NY同時多発テロによる貿易センタービル倒壊	● 芸予地震における応急危険度判定実施。建物相談ホットライン開設 ● 愛媛県地域貢献活動センター設立 ● 愛媛県トイレマップ作成、冊子発行	 芸予地震 ▶
2002 (平成14年)	5月 FIFAワールドカップ開催(日本・韓国共催) 10月 北朝鮮拉致被害者5人帰国	● 委員会規程の全面改正により委員会数11→7へ改変 ● 中四国B青年・女性建築士の集い(愛媛大会) ● 第1回ソフトバレーボール大会開催(優勝川之江支部)	 青年・女性の集い ▶
2003 (平成15年)	2月 スペースシャトルコロンビア号空中分解、墜落 12月 自衛隊イラク派遣決定	● 4月 愛媛県建築士会ホームページ開設 ● 継続能力開発(CPD)制度開始 435名参加 ● えひめ暮らしと住まいフェアにおいて「うす削り大会」開催 ● 愛媛県武道館完成	 うす削り大会 ▶
2004 (平成16年)	10月 新潟中越地震 (M6.8) 12月 スマトラ沖地震発生 (M9.3)	● 青年委員会 四国交流会in道後 ● 9月14日 愛媛県と「愛媛県地震被災建築物応急危険度判定士の招集に関する協定」を締結 ● 専攻建築士制度 発足 146名認定 ● 若手建築士(志) in愛媛伊予・内子・大洲)で開催	  ▲ 協定書に調印 ◀ 四国交流会 in 道後
2005 (平成17年)	3月 愛・地球博開催(愛知) 4月 JR福知山線脱線事故 11月 構造計算書偽装問題発覚	● 3月、16年度をもって「建築士を対象とする指定講習」の大臣指定廃止 ● 川之江支部と伊予三島支部が統合 ● 女性委員会異業種勉強交流会「タレント車だん吉氏」	 女性委員会車だん吉さんと ▶
2006 (平成18年)	3月 第1回WBC開催(日本優勝) 8月 冥王星が惑星から除外	● 文化財委員会「建築文化市民講座」 ● 女性委員会「造園勉強会」 ● 青年委員会「古谷誠章氏講演会」	  ◀ 古谷先生 ▲ 造園勉強会

西暦	世 相	愛媛県建築士会・建築界の動き	写 真
2007 (平成19年)	4月 年金未登録統合5000万件判明 10月 日本郵政公社民営化	● 建築基準法一部改正施行に伴う講習会実施（3会場 482人受講） ● 建築基準法一部改正施行	
2008 (平成20年)	1月 中国冷凍餃子による食中毒問題 9月 リーマンショック	● 松山支部と久万高原支部が統合 ● 文化財委員会とまちづくり委員会が統合 ● 第51回建築士会全国大会「とくしま大会」 ● 建築士定期講習（法定）義務開始 ● 構造、設備一級建築士制度施行 ● 一級建築士免許、カード型に変更	 「とくしま大会」▶
2009 (平成21年)	5月 裁判員制度施行 6月 新型インフルエンザ流行	● 愛媛県建築士会が二級、木造建築士免許申請に係る指定登録機関に指定 ● 二級、木造建築士免許証明書がカード型に変更 ● 青年委員会「NISSAN中島敬氏講演会」 ● 長州大工が遺した建築文化シンポジウム	 ▲ 基調講演 犬伏武彦氏 ◀ フェアレディZと中島氏
2010 (平成22年)	6月 小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還 10月 チリ鉱山落盤事故、作業員33人生還	● CPD制度、専攻建築士制度のオープン化 ● 「建築甲子園」第1回開催 ● 「お仕事フェスタ」に相談員として5名派遣	 ▲ 建築甲子園 ◀ お仕事フェスタ
2011 (平成23年)	3月 東日本大震災（M9.0）福島第一原子力発電所事故発生 7月 FIFA女子ワールドカップで日本代表優勝	● 文化財・まちづくり委員会古民家調査 ● 中四国B青年・女性建築士の集い（愛媛大会） ● 全国大会（大阪大会）中止	 中四国B青年・女性建築士の集い ▶
2012 (平成24年)	2月 東京スカイツリー竣工 10月 山中伸弥氏IPS細胞でノーベル生理学、医学賞受賞	● 公益法人移行認定申請及びそれに伴う定款変更、規程の制定 ● 青年委員会技術講演会「講師：和田耕一氏、織田博氏」 ● 女性委員会照明勉強会「講師：花井架都彦氏」	

西暦	世 相	愛媛県建築士会・建築界の動き	写 真
2013 (平成25年)	4月 アベノミクス始動 9月 2022年夏季五輪東京開催決定	●4月公益社団法人としてスタート ●第56回全国大会「しまね大会」 ●中四国B若手建築士(志)交流会in愛媛 参加者140名 ●技術講演会「松村正恒・丹下健三」講師：豊川斎赫氏 	 ▲若手建築志(士)交流会懇親会 ◀「しまね大会」
2014 (平成26年)	4月 消費税が5%から8% 10月 赤城勇氏、天野浩氏、中村修二氏がノーベル物理学賞受賞	●住宅リフォーム(解体)工事におけるアスベスト対策講習会を開催 ●木造住宅耐震改修工事講習会を開催	
2015 (平成27年)	3月 耐震ゴム性能データ改ざん問題 10月 マイナンバー制度通知スタート	●改正建築士法の解説講習、改正建築基準法の解説講習実施 ●建築士会全国大会「石川大会」において青年委員会が地域実践活動発表会で優秀賞を受賞 ●八幡浜港拓「子どもガイド育成」 	 ▲全国大会「石川大会」発表者 ◀子どもガイドのみなさん
2016 (平成28年)	4月 熊本地震(M7.3) 5月 伊勢志摩サミット開催	●西条支部と周桑支部が統合 ●木造住宅耐震診断派遣業務開始 ●ヘリテージマネージャー養成講座開始 ●熊本地震、応急危険度判定士10名派遣  ヘリテージ講習風景(内子)▶	
2017 (平成29年)	5月 プレミアムフライデー始まる 7月 九州北部豪雨	●会費値上げ(正会員12,000円⇒18,000円 準会員11,000円⇒12,000円) ●三井所清典氏技術講演会 ●とびだせ建築士in東予高校「橋を作ろう」 	 ▲三井所連合会長 ◀とびだせ建築士

西暦	世 相	愛媛県建築士会・建築界の動き	写 真
2018 (平成30年)	6月 大阪府北部地震による学校の ブロック塀が倒壊し女児死亡 7月 西日本豪雨、14府県220 人以上の死者を出した	●総会において愛媛県建築士会の建替えが議決された。 ●7月の豪雨による住宅被害の補修、再建相談窓口を吉田町に開設 ●「愛媛の古建築を訪ねて」文化財・まちづくり委員会33年の活動記録をまとめた冊子を発行	 ▲ 地鎮祭  ▲ 7月豪雨(大洲市内)  ▲ 被災住宅相談コーナー
2019 (平成30年 /令和元年)	5月 「令和」に改元(5月1日) 10月 消費税が8%から10%に 首里城火災	●愛媛県建築士会館完成 ●都市計画法・建築基準法制定100周年記念式典において、文化財・まちづくり委員会が国土交通大臣より感謝状を頂く。 ●12月10日 9士業による「愛媛県士業連携協議会」発足	 ▲ 9士業調印式  ▲ 建築士会館完成
2020 (令和2年)	1月 国内初新型コロナウイルス感染者を確認 3月 甲子園春、夏中止 3月 東京夏季五輪1年延期	●愛媛出版文化賞第四部門賞に選定され、表彰された。 ●中四国B大会「愛媛大会」新型コロナウイルス感染拡大のため中止 ●第63回建築士会全国大会「広島大会」新型コロナウイルス感染拡大により1年延期 ●改正建築士法に基づき、建築士の登録申請時、実務経験審査を開始	 ▲ 愛媛出版文化賞贈呈式
2021 (令和3年)	4月 ゴルフ松山英樹マスターズ優勝 7月 東京夏季五輪2020開幕 10月 真鍋淑郎氏がノーベル物理学 賞受賞	●第63回建築士会全国大会「広島大会」規模縮小し、東京で開催 ●一級建築士に係るオンライン免許登録申請システム開始	
2022 (令和4年)	2月 ロシアがウクライナ侵攻 7月 安倍元首相銃撃され死亡	●ヘリテージマネージャー協議会発足 ●第64回建築士会全国大会「あきた大会」において、愛媛県建築士会青年委員会が実践活動発表会で最優秀賞を受賞	 あきた大会表彰式▶

建築と人新世 (アントロポセン)

道上壯 / VuA

「人新世（じんしんせい）」という言葉がある。人新世（アントロポセン）とは、地質学における人類が繁栄した時代を象徴する地層のことで、最も大きな特徴はプルトニウムを含んでいることだ。核実験によって全世界に降ったプルトニウムは、世界のどの地層からでも検出されると言われている。

YM.House
敷地



YM.House
躯体竣工



建築は、人新世だ。その昔、僕らのご先祖様のホモ・サピエンスが草原で暮らしていた頃には、建築は存在していなかった。人類が文明や文化を持ち、技術や情報を発展させられるようになって初めて、建築は登場してきた。建築は人類の繁栄の証でもあると同時に、地球にとってはプルトニウムと同じように厄介なものになってしまった。なぜなら、建築に関わる様々なものが、地球環境の破壊に繋がっており、元に戻せない傷跡を次々と刻んできたからだ。

その昔、建築は自然と共にあった。自然素材を使い、やがては自然に帰っていった。昔の日本の木造家屋が、まさにそうだった。木と竹と土と紙を使い、火事で燃えても、風雨で腐っても、大地に帰ってゆくことを繰り返していた。建築は自然の循環の中に組み込まれていて、建築をつくることに何の気兼ねもする必要がなかった。

その昔、都市は自然と共にあった。道はほとんどが土、建造物の大半は木、海や川の護岸や堀の端は石。大火に見舞われても、台風に襲われても、大地に帰ったり、再度組み直したりを繰り返していた。江戸時代末期の江戸の写真を見たことがある。当時の東京は木造都市だった。

世界有数の大都市でありながら、そこは完全な循環型社会だった。

今、僕たちがつくっている建築は、プルトニウム化している。プルトニウムの半減期は2万4000年だ。僕たちの建築が何万年も残ることはないが、意図的に処分しない限り、数百年は残ってゆく。プルトニウムは放射性元素で、人体の健康に悪影響を及ぼす。僕たちの建築も廃棄物になると、地球環境の浄化に悪影響を及ぼす。共に好ましくないものであることに変わりはない。

僕たちの建築は、今の建築は、どうあるべきなのか？ 幾つかの解答が語られているが、そのどれも実は現実的ではない。その理由は、努力をしなければならないからだ。昔の建築は、エコロジーを意識して無理な努力を重ねてつくったものではない。身近な手軽に入手できる材料や素材を使ってつくり、結果的に自然の循環の中で成立していたのだ。つまり、努力とは無縁な営みだったからこそ、幅広く浸透し、継続されてきたという背景がある。

人類は近代以降、快適性にとっても貪欲になった。特に、自然環境からの不快感を排除する考え方が顕著になって

ANTHROPOCENE

いった。人類は自然と共にあるという考え方から、自然をコントロールするというホモ・デウス（人類が神）的な考え方へと変わっていった。近代の様々な技術の進化や発展が、人類を思い上がらせてしまったのだ。

あなたは、建築をどうしてゆきたいだろうか？地球と併存できるものにしてゆくのか？終末を覚悟してエゴイズム化してゆくのか？もっと色々なことを考えて、もっと様々な知恵を寄せ合わせて、最適解を見つけ出してゆく必要がある。答えは、今からまだこれからなのだ。

僕の手掛けた建築も、厳しい見方をすればプルトニウムだろう。幾つかの建築を設計してきたが、今のような考え方は皆無だった。建築をつくることには一生懸命だったが、建築ができてからの行く末については全く無頓着だった。アントロポセンの言葉を知ってから、僕は改めて建築の在り方を考えるようになった。このコラムは、ある意味、自分の未熟さへの懺悔と言えなくもない。

遙か未来、人々が今の建築の遺構を目にした時に、どんなことを思うだろうか？法隆寺やパルテノンやノートルダム寺院のように、価値あるものとして歓迎してもらいたいものだ。逆に、再利用できない放射性廃棄物のように、疎まれたくはないものだ。日本では、省エネ基準等が引き上げられて、百年住宅等のキーワードが声高に叫ばれている。生れ出づる建築についてのアイディアは、色々と議論されているようだが、地球環境で循環する建築についてのアイディアは、まだ皆無と言っていいだろう。

遙か昔、1960年代にバックミンスター・フラーは「宇宙船地球号」という考え方を提唱した。「我々は、限られた地球という宇宙船に乗っている」と言うものだ。当時のヒッピー文化や社会に大きな影響を与え、やがてはアップルのスティーブ・ジョブズや建築家のノーマン・フォスターを生み出すに至る。変わり者で夢想家と言われたフラーが、世界を変える逸材を生み出したことを、僕たちは忘れてはならない。

YM.House
外観



YM.House
リビング



捕鯨の反対運動は、たった一人の青年から始まった。温暖化の反対運動は、たった一人の少女から始まった。建築と地球環境との関わりは、誰から始まるだろうか？僕だろうか？あなただろうか？それとも他の誰かだろうか？いずれにしても、喫緊の問題として、たった一人でも、多くの人々でも、動き出さなければならない時期に来ていることは、確かなことだろう。

サッカー日本代表は、ワールドカップでドイツとスペインを撃破した。そして、三苦の1ミリの奇跡を起こした。不可能と思っていたことを可能にし、起こり得ないと思っていたことを起こした。そう、僕らにもそんな力があるはずだ。建築を地球環境に循環させることは、決して難しくはない。

道後温泉の遊郭について

前編

執筆：一級建築士 野本 健
監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



▲【宝厳寺】（令和3年時点）

<ことわり>

以下記載内容は、現在の状況や収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

はじまり

令和5年の現在、道後温泉周辺は活性化基本企画を元に活性化に取り組んでいる。その中の一つに上人坂の活性化が挙げられている。この場所は古くは遍路道、遊郭、ネオン坂と様々な歴史を持つ坂道である。しかし、度重なる法律の改正などにより、この坂道から店が消え、ほぼ更地で閑散としているのが現在の状況である。

遊郭や風俗の歴史を持つことにより、この場所の歴史を語ることは一種のタブーとされてきたが、昨今の歴史を見直し発展させていく状況の中で、どのような歴史をこの場所が歩んできたか今一度整理が必要があると考え、筆を執った次第である。



▲明治初期の松ヶ枝町（提供：二神 將）



▲令和初期の松ヶ枝町

道後十軒茶屋の誕生

昔から温泉場に限らず、人が集まる歓楽街には女性と楽しむ場所ができた。道後の町にも「湯女」と呼ばれる人たちがいたが、天保11年頃(1840)に松山藩が遊女を5・6人抱える「十軒茶屋」の営業を認めた。

当時は遊女たちと遊ぶ料金を「線香代」として例えられていた。安政3年(1856) その一部の料金を湯之町に上納するなどの措置が取られ、後の3層楼の道後温泉本館の改築費用に充てられたという。

明治7年(1874)に点在していた十軒茶屋を宝蔵寺が所有する、一部竹やぶであった一帯を開拓して1カ所に集めることとなった。これは遊女による病気の蔓延や犯罪防止が大きな目的であった。移転した当時は23軒であった。(線香代については大正5年頃は1時間9本、朝の6時～晩の6時を昼詰といい30本、晩の6時～翌朝6時を夜詰といい50本であった)



▲平成初期の松ヶ枝町（提供：二神 將）



▲香時計（提供：兎月庵）

道後温泉の遊郭について

駆梅院

遊郭には梅毒という病気が付きものである。その梅毒の治療場所として明治9年（1876）に鷺谷に駆梅院が建設された。この場所は元々、遊郭の候補地であったが、地主との折り合いがつかず、放置されていた場所である。木造2階建、部屋数は約16室、1階は医師や職員などがある職員室と治療室、2階には病室があり、男性が立つと天井へ頭が当たるくらい低く、昭和30年頃（1955）までであった。患者の日常は看護師の監視の元、散歩をしたり、芸者の仕事仲間が手土産を持って来てくれたそうだ。駆梅院は子どもたちには怖い場所で、窓から治療を受けている遊女が顔を覗かせ手を振ってくる様子は怖かったという。



▲ 昭和後期の駆梅院跡（引用：松山有情）

じょうば 道後女紅場

四民平等の原則に基づき、明治10年（1877）に伊佐爾波神社階段横の上人坂裏道に女紅場を8畳5室、6畳1室の規模で設立した。その場所では女性が様々な職に就けることができるように、裁縫、紡績、機織、洗い張り、染め物、読書、算術、習字などの勉強を行った。

この女紅場の設立の意義を訴え、金策に走ったのが後に湯之町初代町長となる、当時愛媛県の職員であった伊佐庭如矢であった。

しかし、連れてこられた遊女たちはその教育についていけず、また施設維持のため裁縫手芸の工

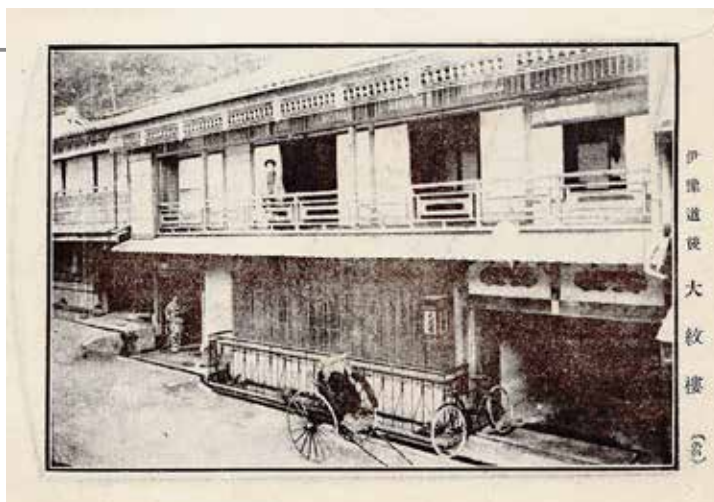
芸品などの製作を行ったが、粗悪品で売り物にならず、5年で閉鎖されたと言われている。

その後、女紅場は病気の検査場所や芸妓芝居の練習場になった。その時の芸妓芝居の指導者は左文字という男の老優だったそうだ。しばらくして戦後の被災者の収容所も兼ねていたが、とうとう空き家となり、令和3年時点では空地となった。

遊郭と裏道

明治10年(1877)に大岩楼という数多い芸者置屋の中でも豪華な建物があり、約40人の従業員を抱えていたが昭和49年(1974)の火災で焼失してしまった。大岩楼を訪れる客は医者をはじめ相撲取りなど多岐に渡ったという。

遊郭の裏には狭い裏道があり、遊郭に遊びにくる客は他のお客と鉢合わせになることを嫌い、どうしても表の通りを避ける心理を利用した策なのであろう。お客は表玄関から入り、従業員がその靴を裏口まで運び、裏道から帰ってもらうという流れをとっていたそうだ。



▲大紋楼 (提供：二神 将)



▲上人坂の裏道 (引用：松山有情)



▲大岩楼 (提供：二神 将)



▲大岩楼内部 (提供：二神 将)

道後温泉の遊郭について

伊藤博文の来浴

伊藤博文は明治42年(1909)に保養の目的で道後温泉を訪れた。御付には名妓であった大岩楼のおふじを付き添わせ、日に2回、霊の湯に入浴し疲れを癒した。伊藤博文が2週間、道後温泉に滞在したことは東京でも話題となり、多くの人が道後温泉という場所を知るきっかけとなった。

伊藤博文は道後温泉に扁額を贈り、その扁額は現在の「子規記念博物館」の場所にあった「新温泉」という公衆浴場の休憩室に飾られていた。



◀ 大岩楼のおふじ
(引用：勝山花の面影)



▲ 伊藤博文の扁額 (提供：道後温泉事務所)

「夢の家」の誕生

明治17年(1884) 軍人たちがあまりにも遊郭で遊びすぎるため、軍人たちのための簡単な遊び場所とし「下等座敷」が許可された。これは松ヶ枝町の入口にあり、屋号を「夢の家」といった。「夢の家」は軍人たちのための施設として始まり1夜に50人の客を取るほど大繁盛であった。

明治27年(1894)、あまりに繁盛したため、振鷺園にあった風詠館(旧2階建ての神の湯本館)を借りて経営した。最初は「夢の家」1軒だけであったが、ますます大繁盛し第2の松ヶ枝町を形成する勢いでどんどん建物が建設されたという。



▲ 「夢の家」の内観 (引用：松山有情)



▲ 昭和32年の松ヶ枝町（引用：松山市住宅明細図昭和32年）

- 風詠館は様々な使われ方が古資料に記述されている
- 1階では伊佐庭如矢が発案した湯ざらし団子売っていた
- 俳句会の蜂須賀兵蔵や二神重治が俳句を読んだ
- 又新殿の玉座の間の下紙に表具師の名を連ねた紙が見つかり、この風詠館で署名が行われていた

明治33年(1900)、小松宮殿下が又新殿・霊の湯棟を訪れた。そして伊佐庭如矢町長が3階の4畳半8畳の間でお茶をもてなしたが、その時に殿下が振鷲園を眺めると、「夢の家」の遊女たちの

姿を無礼と感じ移転を命じた。そして、明治34年(1901)に松ヶ枝町に移転したのであった。(場所が上に上がるのも無礼であるから「下等」を強調することでようやく許可が下りたという)

そして賑わいを再び取り戻し、更に上の敷地に「朝日楼」を建設し、繁栄を極めていくのであった。戦後は遊郭専門の店は3軒ほどで、他の27軒は芸者置屋だったそう。『夢の家』は23人ほどの従業員を抱え、お客さんのほとんどが兵隊だったと言われている。

後編に続く

タージマハールへのインド旅 (ジャイプル編)

西予支部 松山 清

1 一生に一度は見たいタージマハール



▲ 1日10万人が訪れるタージマハール

“世界一美しい建築物”と言われるタージマハールは、ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンが1631年に死去した愛妃ムムターズのため22年の歳月を費やして建てた、白大理石の世界一豪華な墓。ヤムナー川の対岸に黒大理石で自分の墓である第2のタージマハールを造るという王の野望は、国が破綻することを恐れた息子によって断たれ、その後王はタージマハールを望むアーグラ城に幽閉され生涯を終えた。皇帝のロマンの「夢の跡」だが、世界の“今”を知るにはインドへ行ってみなければと、同志友人6名で2015年秋に訪ねた。首都デリーから南下してジャイプル、アーグラと古都の世界遺産を巡る旅で、日本人に人気がある国とはあまり言えないインドだが、未知なる国の一面を知った。

2 出発前に救急搬送、苦渋の決断

インドへと出発したのは11月18日(水)だが、その4日前の朝、原因不明の目眩に襲われ西予市立病院へ救急搬送された。いつも通り午前6時半に目覚ましがり鳴りそれを止めたが、どうもおかしい。激しい目眩がする、さらに吐き気も……。二日酔いどころの騒ぎではない、それを遙かに凌駕する程の激しさだ。目の

前の天井がぐるぐる回る。椅子に座っていることも出来ず、このままではぶっ倒れてどこかで頭でも打ちそう、かといってベッドまで辿り着けそうもなく、そのまま床に伏して動くことが出来なくなった。早朝にもかかわらず近所の医師が来てくれた。診察では「内耳性からくる目眩で、これでは救急車を呼ぶしかないでしょう」と言われ野村病院へ救急搬送されたのだ。床に伏した時に思ったのは、「このまま意識を失えば死んでしまうんだろうなあ」ということ。死ぬ時はそんなものなのかもしれない。当り前の普通の生活の中で、突如として死が訪れることもあるのだろう。

搬送されたのが土曜日早朝だったためその日は入院ができず、耳鼻咽喉科でも診察を受けるようにと言われ、頭の検査をして一旦帰宅。耳鼻咽喉科医師の友人にインドへ行けるかメールで相談したら、「月曜日に診察してから判断しましょう」と言われ、キャンセルは1日繰り延べとなったが、相当の割合のキャンセル料も覚悟した。診察では「インド行きのことはまだ判断できない」とのことで、「当日までわからないんじゃないですか」という答えだった。それは、行ける可能性があるかと前向きに捉え、回復に専念した。前日の最終判断では「ストレスが目眩の原因だと推定されるが、本当の原因はわからないのが普通だ。旅に出ると楽しいので良くなるかもしれない」ということで、「行ってみますか!？」という結論になり、翌日の出発まで点滴を続けた。

3 デリーから南下、ジャイプルへ

3.1 成田空港からデリーへ向かう

11月18日(水)夕方、成田発のANA便でインドのデリーへ向かう。成田空港では飛行機に搭乗する際には雨脚が強くなったが、沖留めの飛行機まではバスで移動し、激しい雨の中、タラップから機内に乗り込んだ。座席はほぼ満席状態で、日本のエアラインらしく日本人とインド人がほとんどを占めていた。インドへ

は1日に何便も日本から飛んでいるのにこれ程混み合うとは意外だった。最近はその行き来が盛んになっている証だ。

一方、空港のチェックイン後、円をルピーに両替しようとしたら「日本ではルピーを扱うところはない」と言われ、インドと日本の経済交流はこれから発展していく段階でもあるのかとも思った。

定刻よりやや遅れて飛行機はテイクオフ。雨模様なのですぐに雲の中へ入り、窓からは何も見えない。松山から羽田へフライトしてきたルートを折り返しなぞって西に向かって飛び、出発して1時間以上飛んでも、未だに松山沖上空を飛行していた。そこからさらに西へと飛んで釜山を経て黄海を横断し、中国大陸を合肥・武漢・昆明へという飛行ルートでインドに向かった。



▲闇に突然現れた昆明の夜景



▲空港の入国審査

日本列島に停滞する前線が強烈なせいか、長時間ピッチングの揺れが続き、雲の中をデリーを目指す、中国の昆明辺りまで来ると天気が急速に回復して地上の明かりがきれいに見えた。到着時刻は現地時間で深夜0時15分、日本時間だと朝4時15分。この時差で海外旅行の大変さを感じてしまう。昆明を過ぎるといよいよインド上空のエリアだが、再び町の明かりはなくなり漆黒の闇の世界が窓の外に広がった。そしてインディラ・ガンジー国際空港に到着、無事入国できてそのままホテルに直行した。

3.2 デリーの世界遺産クトゥブ・ミナール

11月19日(木)、デリーのホテル、ザ・グランドニューデリーで爽やかな朝を迎える。昨夜、寝たのが午前2時半頃だったので、それは日本時間では朝の6時。そして、午前8時起床ということは、体内時計は午前11時半くらい。結局約6時間の睡眠だが、この微妙な時差のため体調が少し狂ってしまった。

インドは11月から3ヶ月間乾季に入るので、旅の間は殆ど晴れの日が続いた。朝も涼しくて、ホテルの芝生の庭を手入れしている作業員の姿が印象的だった。



▲インド最初のモスク、クトゥブ・ミナール

どこのホテルも庭園は広大で立派であり、イギリス式の庭園がよく手入れされ非常に美しく保たれていた。

午前9時からホテルのレストランでバイキングの朝食を取る。味噌汁もウィンナーも日本のものと比べると味は落ちるが、食べられない程でもない。ドーナツのようなパン2斤とスクランブルエッグを食べて、コーヒーを飲む。周りはインド人ばかりで、隣の席では盛んに商談をやっていた。思わず噴水のある庭園を歩きたくなり朝食後その美しい庭園を散歩して、それからデリー観光に出発した。

ホテル出発は午前10時半。深夜の到着だったため遅めに設定されていた。9人乗り程の専用バスに乗り込み、デリー市内を抜けクトゥブ・ミナールという南西部にあるイスラム教寺院遺跡へ向かう。

そこへ行くまでのデリー市内の様子は時代錯誤を感じさせるような、戦後に戻ったような光景だった。道路の整備状況は非常に悪く、車線が分かれていない。2車線のレーンを4車線分として車が走っているみたいなものだ。舗装も十分でなく歩道は土がむき出しだったり小さな3輪自動車トゥクトゥクが巾を聞かせて走っていたり。大通りも自転車やバイクが主役のように走る。道路にもましてドライバーの運転マナーが非常に悪い。クラクションが常にどこから聞こえているし、割り込みも酷い。信号無視なんてどうって事ないような運転状況だ。「デリーで運転することが出来れば世



▲ホテルの庭園



▲旅行社専用貸切バス



▲ 渋滞するデリー市内



▲ 自転車やバイクが主役



▲ 旅行者用の乗合バス



▲ ヒンドゥー教寺院跡



▲ モスクの回廊

界中どこでも車を走らせることが出来る」とガイドのチョウハンさんが話していた。

旅行者が乗るバスはフロントにすべて“TOURIST”と大きく表示しているので、交差点で停止するとどこからともなく子供たちが駆け寄ってきてサッカーボールや風船を買ってくれとせがまれる。無視していてもしつこく懇願する。そのうち、側転やらバク転などをしてお金をせびりだすのである。“ツーリスト”と表示があるので尚更そのようなことをするのだが、インドは貧富の差が激しく、貧困層は生活していくのに必死なのだ。

出発して30分程で世界遺産クトゥブ・ミナールへ到着。気温は観光に丁度いいくらい。ここには、赤砂岩でできた尖塔があり、1993年に世界遺産に選定されていた。

駐車場はあるにはあるが、整備がほとんどされておらず、ザッとしたそんなにゆとりのない広場に車を停める。修学旅行の高校生たちが大勢やって来ていた。整備がされていない所へ行くと、盗難とかいたずらなどが心配され、やや不安を感じた。

道路を横断して尖塔を見に行った。時間と共にどんどん観光客は増えていき、家族連れや学生、インド全土から集まってくる観光客などで広い遺跡の広場に人が溢れ始めた。近くで見ると塔はたいそう立派で、それも組石造りでイスラム文化の力の強大さを訴えているよう

うだった。ヒンドゥー教徒を征服した記念塔として建てられたものだが、周辺の破壊されたヒンドゥー教寺院跡などの壁や柱の



▲ 五層構造の尖塔



▲ 上部は砂岩と大理石で構成

石の彫刻は繊細で見事。芝生の広場にはリスが走り回り、デリーのオアシスのような所だった。

遺跡を1時間ほど見学して、まだ時間が早いのだがインド料理の昼食を摂るためデリーの街をレストランへ向かう。インド料理が何かと思えば端的にはカレーで、とても日本のものと比べると食べれたものではなかった。チキンカレーに野菜カレー、豆カレーにほうれん草カレーと様々あったが、野菜カレーが一番カレーらしい。一人一人セットで出されるが、豆カレーなどはカレーの味が全くなくて、誰も殆ど手を付けず不人気だ。ビールは1本約700円。



▲ インド料理のカレー



▲ 野菜カレー

午後の予定はデリーから6時間程高速道路を南下して古都ジャイプル

へ移動。インドの高速道路は日本のものと比べものにならず、ガードレールもなくお店が建ち並ぶような道路が有料の高速道路となっていた。バイクはヘルメットを被っていないし、逆行する車も頻繁にあった。何より驚いたのは高速道路に牛がたくさん歩いていたり休んでいたり、たまに車に跳ねられて死んでいたりという状況だ。バスには屋根の上まで人が乗っていたし、高速道路をトラクターが走っていたりもする。そのような未整備の高速を延々とジャイプルを目指して走った。所々に“市”のような場所もあった。高速道路の脇では牛が残飯を食べているのもよく見かけた。

ジャイプルへ到着するとオイルマッサージをすることになった。料金が\$70というのはちょっと高いのではないかと思ったが、みんなで一緒に経験するというのだ。チョウハンさんが俄然商売気をだして勧めるので、その勢いに押されてしまった。



▲ 屋根の上にも人が乗る



▲ 残飯を食べる牛



▲ 高速道路脇に並ぶお店

3.3 砂漠の国の州都ジャイプル



▲風の宮殿

前日はデリーから車で約270km南西へと走りインド最大のラージャスターン州の州都ジャイプルまでやって来た。結構旅の疲れも溜まっていたが、オイルマッサージの効果がどれくらいかは未知数とはいえ、何となく体が軽い感じの気分で朝を迎えた。ヒルトンホテルの朝食なのでこれ以上を望むことはできないが、味は今一歩。それは海外旅行の宿命だが、我が家の朝飯の方がよっぽど旨い。それでも疲れが残っていないのは有り難いことで、出発は午前7時半と早めだが、ガイドのチョウハンさんに従ってホテルを後にしてアンベール城へ向かった。

途中で“風の宮殿”に立ち寄る。かつて宮廷の女性たちがこの窓からピンクシティーと呼ばれるジャイプルの旧市街を見下ろしていたらしい。正面から見たほど建物は壮大ではなく薄っぺらな壁のような造りで、ジャイプルのシンボルとなっていた。

最初に向かうのはアンベール城。16世紀から築城が始まり、アンベール王国（カチワーハ家の王国）の財力を物語るような豪華な造りだ。この城を丘の麓から見上げると、荒涼とした山に城壁が巡らされ、それが城をなお一層引き立てており、初めて見るその風景に圧倒された。

道中、ジャイプル市街地から少し走ると湖があり、そこには“水の宮殿”と呼ばれる美しいお城が湖水に浮かんでいた。かつてジャイプル王のマハーラージャが避暑に使っていた所で、日本で言えば桂離宮のような

もの。車窓からだけではもったいないので、帰りには車を停めて記念写真を撮ったが、逆光だったのが心残り。

車は山岳エリアを抜けて行き、ある程度谷のような地形を攻め入った所で大きな展望の良い湖に出た。ここからは山の上にある世界遺産アンベール城やさらに高いところの稜線に聳える砦、城壁などが異次元の感覚で広がっている。インドにこのような他国を凌ぐ城があること自体新鮮で、その意外性が新しい発見でもあった。

山の上のアンベール城までバスでは行けないので、湖畔の広場でジープタクシーに乗り換える。狭いジープの荷台に6人が詰め込まれて、石畳の細い上り坂をチャンド・ポール門まで行く。まだ、時間が早いためか観光客はあまりやって来ておらず、門のあたりには数十人くらいがぼちぼち姿を見せ始めていた。

お城は丘の上なので展望抜群。周辺の風景を臉の裏に焼き付けようとじっくり眺めた。旅でいくら感動した景色でもやがて時間と共に忘れ去ってしまうので、やっぱりそれはもったいないと私はシャッターをできるだけ切る。例えデジカメのデータであろうと後で見直したとき、映像があれば鮮やかにその時の感動を呼び戻すことが出来る。しかし、10年も過ぎるとたまには写真を見てもそれがどこでどのようなシチュエーションで撮影したのか思い出せない場面もあるのだが。



▲広場から見たアンベール城宮殿



▲チャンド・ポール（月門）



▲お城の眼下の湖



▲水の宮殿



▲アンベール城



▲湖から望む城壁



▲稜線の砦



▲スィン・ポール（獅子門）



▲ジャレブ・チョウク



▲ 広場の象タクシー降り場



▲ 宮殿裏の庭園

チャンド・ポール (月門) からアンベール城の中に入る。するとジャレブ・チョウクというお城で一番広い広場へと出た。そこには、名物の象のタクシーでアンベール城へやって来た観光客が、象から下りてくる乗降場があった。ガイドのチョウハンさんは、象は危険だから近寄らないように、と言うのだが、ちょっとその訳は不明のままだった。最近事故が起こったと言っていた。さらに、スィン・ポール (獅子門) から入城しどんどんお城の中へ進んでいき、一般謁見の間へ。今でも残っている柱や天井の装飾に見入りながらアンベール王のプライベートスペースへと入った。イギリス式の庭園を抜けた所にザナーナ・マハル (ハーレム) というお後の住居があり、その辺りまで見学した。

朝7時半にホテルを出発してきている理由がこまできてよくわかった。ガイドさんは早めの空いた時間に、この素晴らしいアンベール城を我々に見せたかったのだ。お城から出て再びジープに乗り湖畔の駐車場まで行く道には多くのバスや観光の車で身動きできないほどの激しい渋滞となっていた。



▲ ザナーナ・マハル



▲ 乗客を待つ象タクシー



▲ 我々が乗るジープ

3.4 天文観測儀 ジャンタル・マンタル

ジャイプルが宝石の産地という話をバスの中で聞きながら再び市内へと戻り、世界遺産ジャンタル・マンタルを目指す。これは、ジャイプルを築いた王・マハーラージャ、サワーイ・ジャイ・スィン2世が占星術に興味を抱き、巨大な天文観測儀ジャンタル・マンタルを作ったというもので、ここにも大勢の観光客が訪れていた。



▲ ジャンタル・マンタル



▲ ジャイ・プラカーシュ・ヤントラ

この芸術的な天体観測儀は世界遺産に選定されており、天文台といったところ。12の星座を観測するための観測儀で、ジャイ・スィン2世が発明した。ジャイ・プラカーシュ・ヤントラの隣には同じく星座を観測する装置が各星座ごとに作られていた。



▲ 天体観測儀



▲ シティ・パレス

ジャンタル・マンタルの隣には、マハーラージャが今も暮らしているという住居シティ・パレスがあり、一部が博物館となっていた。シティ・パレスの入口には門番があり、中を見学していると蛇使いが門の横でコブラを操っていて、ドキッとさせられた。昼食はまたまたカレーで、お決まりのようにまずい。



▲ シティ・パレス入口



▲ 蛇使い

3.5 アーグラーへ向かう

午前中からのジャイプル観光を終え、昼食後アーグラーへ向かう。途中は高速道路を走る、といっても牛や猿が闊歩している。ジャイプル市内はもっと酷くて、イノシシの家族やラクダ、その他の動物も人間と同じように街の中で暮らしていた。



▲テント暮らしも多い



▲牛が街中を闊歩

高速道路を走る車も、荷台にはタクシー的に大勢の人を乗せていて、しがみついてまで荷台に乗っていた。定員などあったもんじゃない。道の両脇にはお店があって、いろいろな商売をしており、人もずっとたむろしている状況が続き、逆行や横断など当たり前のように見られた。さすが、13億の民の国だ。その中で38%の人が学校へ行っていないらしい。人々の暮らしだが、住宅もあるが、街の中にはテント暮らしの人も多い。広場では必ずと言って良いほど何か、動物がいて残飯などを食べている。家族連れのイノシシも至る所で見られた。食べる習慣がないので、捕まえられるそうだ。ラクダまでいた。当然ながら牛もあちこちに…。噂には聞いていたが、本当に牛がうろうろしているとは。高速の料金所で停車したバスには、物売りが殺到してきた。



▲街で暮らす猪の家族



▲高速道路を移動する人々



▲広場にたむろする動物



▲ラクダもいる



▲バスに集まる物売り



▲牛が街中を闊歩

アーグラーまでの道中は目を疑うような光景の連続だった。高速道路でトイレに行きたくなくても、パーキングエリアはないので車を路肩へ停めて、畑の中で立ちションである。コブラでも出てきたらどうか、と余計な心配をしたが、無いものは無いので仕方ない。アーグラーまではジャイプルから東へ約 250 kmで6時間。バスは 100 km以上の猛スピードようにも感じたが、それは音だけでスピードは 70km/h程しかでていなかった。道路が整備されていないから早く思えたのだ。

4 デリーとジャイプルを訪ねて

インドの歴史・文化や現状を日本人はあまり知らない興味も持っていない。東南アジアよりもかなり遅れた印象で日本人には魅力的と感じられないのだろう。旅番組や雑誌になると、取り上げる頻度が極端に少ないため、デリーとジャイプルの世界遺産のことでさえ全く知らなかった。しかし、ムガル帝国の歴史は偉大なもので、欧州に引けをとらない遺跡や古城が見られる一方、街中で動物が人間と共存して生きている現実には想像を絶するものでもあった。

あまりにも日本とかけ離れたインドの姿に驚くあまり、心配だった体調は徐々に回復し、忘れるまでになっていた。

後編“アーグラーとタージマハール”に続きます。

愛媛の登録有形文化財 「松山地方気象台」

御雇外人ジョイネルに気象台の必要性を建議された当時の日本は1873年（明治6年）に気象台を置くことを決定しました。その後、1990年（明治23年）に愛媛県立松山一等測候所が現在の東署のあるあたりへ建設されます。1928年（昭和3年）に現在の場所へ移され、県の出資によって建設されました。戦時中も休むことなく100年以上も観測が続けられています。



▲松山地方気象台 正面のファサード

建物は萬翠荘と同じ左右非対称で、鉄筋コンクリート造の2階建て一部平屋建ての建造物です。正面が塔屋付き3階建て、向かって左は2階建て、右側は切妻平屋建てとなっています。建築面積は340㎡で、2006年、県下では70番目の国の登録有形文化財になっています。

内部の玄関ホールは吹き抜けとなっており、ギリシャ風円柱や手すりの木部意匠、細部彫刻は萬翠荘にも似た装飾をしています。



▲円柱と装飾

また付属の平屋の小屋裏には鉄骨のトラスも使用されており、入り口のタイルは萬翠荘のものと同色・サイズと

文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和

もに同じで、県の技師であった設計者・戸村秀雄は木子七郎の影響を少なからず受けているものと考えられます。



▲萬翠荘の小屋裏にも似ている

気象台内部には英語で書かれたプレートが飾られており、竣工日や当時の施工費用と共に設計者・戸村秀雄の名も刻まれています。



▲プレートの拓本 CHIEF ARCHITECT H.TOMURAの文字

戦時中は黒色の戦時迷彩が外壁に施されていたようですが、現在はとてもきれいに保存されています。正面塔屋部には時計があったそうですが、現在は円形のくぼみが残るのみです。ですが、塔屋部やバルコニーなど当時のままの意匠を感じることができ、当時の近代洋風建築を知る貴重な建造物の一つとなっています。また、現在も使用され、愛媛の気象観測、地震などの観測の拠点となっていることには感銘を受けずにはられません。人々に気象を伝え、様々な歴史を見てきた気象台は、さらなるニーズに応えるべく、現在リノベーションの最中です。

※現在は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため内部見学は中止されています。

古学堂見学会

日時：2022年12月11日(日) 13:00～15:00

会場：古学堂（大洲市）

概要説明：大洲領総鎮守八幡神社 宮司 常磐井守道さん

現場説明：菅野建設㈱ 菅野隆次さん(文化財・まちづくり委員会歴史文化財部会長)

参加人数：14名



▲古学堂 向かって右側の足場がかかっているところが「文庫」

大洲市にある古学堂は約320年前の江戸時代に神職師弟養成のための私塾として開かれ、のちに広く庶民向けの教育施設となった建物です。ここで学んだ方は、多様な分野で活躍をされています。「伊予最古の図書館」とも呼ばれています。

「文庫」部分は大洲市の史跡にも指定されていますが、4年前の西日本豪雨で、床上2メートル近くまで浸水し、建物が全壊したほか、保存していた書籍などの資料100点以上も水に浸りました。このうち書籍があった「文庫」では先月中旬から修復工事が始まり、現在、傷んだ床や壁をはがしたり新しく壁を塗り直す作業が行われています。

このほか屋根の瓦も外し、これまで使っていた瓦を再利用できるか、点検を進めていました。

工事は今年度中の3月に終わる予定で、工事にかかる費用はインターネットで資金の調達を呼びかけるクラウドファンディングと市の助成金などがあてられるということです。現在修復が行われており、内部を含めての見学をさせていただきました。

文化財修復の手段として、クラウドファンディングを活用しているということが、他の文化財修復等においても有用であると思われます。常磐井さんは、色々な団体の定例会などに赴いて「古学堂」の歴史や意義をご説明され、改修に必要な資金調達に成功されています。

文化財・まちづくり委員会 眞田井 良子



▲八幡神社 拝殿

今回は、古学堂の他、大洲領総鎮守 八幡神社も見学させていただきました。八幡神社本殿一棟のみ、市の指定文化財です。大洲市の肱川沿いは、沖積層の緩い地盤ですが、この八幡神社の部分は硬い岩盤になっており、本殿は岩盤がそのまま基礎として使用されていました。長い歴史の中で、先人の方は八幡神社部分は安全な場所だと知っていたのだと思います。文化財と防災は切っても切り離せないですね。



▲社務所での説明



▲参加者集合写真

女性委員会主催 暮らし+ (プラス) 勉強会 クリスマスリース作りワークショップ開催報告

女性委員会 永井 由起

令和4年12月17日(土)、愛媛県建築士会館にて講師に荒井とも子先生 (instagram @tangent000) をお迎えし、クリスマスリース作りワークショップが行われました。「暮らし+ (プラス) 勉強会」とは、いつもの暮らしに素敵なものをプラスして生活を豊かにするものを提案する、体験型勉強会です。今回は建築士会会員7名、一般2名、計9名が参加しました。



▲講師の荒井とも子先生

まず直径10cmほどの土台になるリースと花材が配られました。仕上がり直径30cmほどにもなると伺っていたので、土台の小ささに驚きました。花材は杉、サツマ杉、ユーカリポラス、ブルーアイス、黒い実のビバーナムティナス (ガマズミ)、ジェイドパール (リュウカデンドロン)、赤い実のサンキライ、スターリンジアでした。



▲配られた花材

花材を15cmほどに切り、土台のリースの周りにバランスを考えて花材を配置、土台にワイヤーをつけ、花材を絡げていきます。1周回ったら上になる位置を決めます。

バランスを考えて配置したはずなのに、なぜかバランスが取れず、わたしは四苦八苦しながら作成しました。

お仕事でも馴染みのある杉は、ヤニが手につきます。指を除菌シートで拭きながら作成しました。皆さん集中して黙々と制作にあたっておられ、新型コロナの感染者が県内でも徐々に増えつつあったこの時期のイベントとしては、万全の感染対策でした。しかし静かすぎたので、スピーカーを用意してスマホからクリスマスソングくらい流せばよかったと後悔しました。



▲先生の参考作品は美しい…

先生に時々アドバイスを頂きながらちょうど2時間ほどで完成。同じ花材を用いて作ったはずなのに、人によって印象の違う作品になるものだなと思いました。

参加者からも「リースを作ってみたいと思っていたけど、機会がなかった。念願叶って楽しかった」などの感想をいただきました。先生から紅白の水引をプレゼントしていただき「クリスマスリースだけど、水引をつけてお正月飾りにもなります」とのことと、今現在も我が家では壁に飾っています。長時間直射日光に当てなければ、長持ちするそうです。

今回は、女性委員会の叶さんに講師の先生をご紹介いただきました。八束さんと鷺尾さんに準備をご協力いただきました。荒井先生、ご参加いただきました皆様、ありがとうございました。



▲各自の作品と、先生と一緒に集合写真

支部研修旅行

四国中央支部 稲村 聡

さる12月16日から2泊3日にて、支部研修旅行として沖縄に行ってまいりました。研修先は那覇市役所、名護市役所をメインとしたRC造建築物の見学でした。参加者は尾藤会長をはじめ、岸支部長と会員メンバーを合わせた総勢10名での旅行となりました。

滞在中は終始雨が降るあいにくの天気模様で、12月とはいえ沖縄で10度を下回る低気温の日もありました。時折吹き荒れる雨風にさらされながら、靴下までビショビショになっても研修を続ける我々が四国中央支部会員メンバーの皆様、本当にお疲れさまでした。



▲ 集合写真

さて、そんな荒れ模様の中、メインの研修先となる那覇市役所を訪れ、実際に建物内部まで入って見学してまいりました。



▲ 那覇市役所

この開口だらけの高層建築物には圧巻されました。設計思想を聞くと、風が通り抜けられるように開口を多く設置したとのことのお話もありましたが、それにしても施工に思いをきたすと大変手間のかかった建物であると感じました。



▲ 名護市役所

次に名護市役所を訪れました。こちらもRC造です。どっかの遺跡のような感じを受けますが、まだまだ現役で使用中和のこと。変わった外観でしたね。

ところで、移動中の車内から沖縄の街並みを見ていましたが、本当にRC造の建物ばかりである印象を受けました。台風がよく通る地域性もあるのでしょうか、それにしても見渡す限りRC造ばかり。最近の建物はいざ知らず、ちょっと古い建物の断熱性能はどうなのだろうと考えてしまいます。ただでさえ暑い地域なのにコンクリートの躯体のみの建物は、夏場の室内気温に辟易としてるんじゃないのかなと想像した次第です。

途中で首里城にも立ち寄りました（この頃には雨に晒されすぎて写真を撮る余裕もなし。笑）。現在復旧工事が進められていますが、数年後には完成とのこと。使用される木材は国内では調達できないため、外国に求めている工事再開となったようです。意外に早い完成時期に少しびっくりしましたね。

さて、途中で昔のお城の跡地にも立ち寄りましたが、皆さんご存じの琉球王朝よりも前の時代では、三国時代として三つの勢力が覇権を争っていたようです。沖縄の北と真ん中と南にそれぞれ覇権を争う勢力があり、その真ん中の勢力が北と南の勢力を滅ぼして沖縄を支配したそうです。その争いに勝ち沖縄を支配したのが琉球王朝のはじまりであったとか。これはまだ知らない歴史だったので面白かったですね。

今回の研修旅行では、建築物のみならず沖縄の歴史に触れる機会も多くあり、大変参考になりました。首里城が再建したらまた行ってみたいと思います。その土地特有の特色のある建築物のみならず、風土にも触れることが出来、有意義な旅行でした。さて次回はどこへ行けるのか？原稿を書きながら楽しみだなと思う今日この頃でした。皆さんお疲れさまでした。

建築士の日 of 行事 「建築模型を作ってみよう」

松山支部 青年・女性委員会 委員長 白石 学

開催日：令和4年8月11日(木) 祝日(山の日)

開催場所：松山市古川集会所

参加者：椿小学校・中学生19名 保護者8名
建築士会スタッフ14名

松山支部の建築士の日 of 行事「建築巡礼inまつやま」を第10回で完結し、新たな行事として、小学生の児童を対象とした家づくり体験「建築模型を作ってみよう」を令和元年よりスタートしました。1回目は青年・女性委員の中で試行錯誤を繰り返して、何とか無事開催する事ができました。イベントを経験して、いろいろ問題や改善点が見つかり、次回はもっと子供達が楽しめる様にいろいろと考えていた頃です。想像もしていなかった、この長いコロナ禍がやってきました。

子供も大人もマスク生活、人と会う事、集まる事が難しくなり、建築士会だけでなく、いろいろなイベントが中止、打合せも出来ない状況となりました。

コロナ禍1年目は、建築士の日 of 行事は中止で決定し、2年目の令和3年は開催を計画しましたが、学校などで感染拡大もあり泣く泣く中止をしました。

そして、コロナ禍3年目の昨年、感染は相変わらずの状況でしたが、withコロナ時代に入り感染防止対策を徹底して第2回家づくり体験を開催する事となりました。

しかし、この準備が想像以上に大変だったのです。どんな組織でも聞く話ですが、長いコロナ禍で人が集まらない、前回の経験や記憶が曖昧になっている……(子供の学校でPTAの役員をしています、そこでも同じ様な話があります)。

コロナ禍の前は定期的に委員会や懇親会があつて活発な活動が継続出来ていました。たった2年か3年ですが、その期間に年齢や仕事等の影響で疎遠になっていく人、イベントがないので活動してくれる新規の会員は増えない、直接会って打合せが出来ない等、建築士会 of 行事が、建築士会自体の存続の危機だと痛感しました。

でも、委員会の少数精鋭の有志の方々と協力して協議を重ね、今回については大きなチャレンジはせず前回とあまり変更のない内容で開催した方が良いと方向で進めました。



▲参加スタッフ

参加する子供達も少し限定して、松山市の椿小学校に、「おやじの会」という父親の会があるので、その会員の子供達や知り合いに参加希望を募りました。

時期は夏休み期間中で、クラブや習い事 of 多い週末は避けて山の日 of 祝日に決めました。

しかし、コロナ禍で感染が心配で参加者が少ないのでは？感染拡大により学校側から開催中止 of 依頼がくるのでは？もしこのイベントで感染者やクラスターが出たら？など準備をしながらも不安は山積みでした。

後で聞いたのですが、コロナ禍でいろいろなイベントが中止になり、子供達が参加できる事が少なくなっていたので、久しぶりに楽しそうだと思って参加しましたと。アンケートでも「初めての家の模型づくりは面白かった」と of 感想に開催して良かったなと思いました。

スタッフもなんとか集まり無事当日を迎えました。



▲模型づくり



▲真剣なスタッフ

久しぶりのイベントでしたが、始まってみると子供達は真剣な目をして建築模型をつくっていました。

中には中学生の参加者もいて、将来の建築士か？建築士会 of 会員か？マスクの下で1人ニヤッとしていました。真剣な眼差しで手伝うスタッフの姿も見られました。

このコロナ禍での、建築士の日 of 行事の準備を通して、建築士会 of 継続の問題をなど痛感しました。

現在の少子化も拍車をかけ、どの建設業界も人材不足です。その事は建築士会にも影響が出てくるのは想像ができます。

今後、このコロナ禍がどのような状況になるのかは不明ですが、この建築士の日 of イベントを通じて、子供達に少しでも建築に興味を持ってもらい、建築業界や建築士会 of 将来に少しでも夢が持てればと思っています。



▲参加の子供達

スタッフとして参加いただいた皆様ありがとうございました。次回は、より一層盛り上げましょう。

♪ Any ♪ のサビを聴きながら 読んでね。

松山支部 高橋 健太郎

資生堂メンズムース・スーパーサラサラを髪にたっぷりつけて吉田栄作を気取っていた平成2年、高校1年生の僕は進路を考えていました。数学はグrogrogro〜だけど国語はプツンなので理系を選択し、トレンドドラマで観た打ち放しコンクリートの部屋がナウいと思って、建築学科を目指しました。赤本でしか大学の情報が入って来ない時代(平成5年。ちょうど30年前!）、初めて降り立った広大な西条キャンパスの田舎具合には、おったまげー!「ああ、美しい〜、私たちの母校〜久谷中学〜♪」よりも田舎やんけ!!東京の大学に行った奴らがソバージュのマブい女の子達と合コンでEZ DO DANCEをノリノリで歌っている頃、僕は大家さんが企画した芋掘り大会で泥んこになっていました。

さて、勉強の方はと言いますと、建築学科に進めば卒業する頃には魔法に掛かったように素晴らしい建築士になれると勘違いしており、全く勉強をしませんでした。チョベリバ。阪神淡路大震災やWindows95にインスパイアされパソコンで構造設計がしたいと思いましたので、パソコンを使う構造力学研究室に入りました。パソコンの構造設計は3D画面でゲームチックなことをするのかな?と想像していましたが、研究室はFORTRANでプログラムを組んでいました。僕は地盤の先生に従事し、大学院修了までの3年間の研究テーマは「遺伝的アルゴリズムによる地盤の同定」。建築の匂いは1ミリもしませんね。大学院2年の時に田中卓志君が学部4年生で同じ研究室に入ってきた際には、なんだか稲中卓球部に出てきそうだなと思いましたね。



▲最後列右から3番目が筆者。前2列目左から2人目が田中君

先生(写真には写っていません。法政大学へ転任されました)は電力会社に強く、就職氷河期にも関わらず選ばれる放題でしたので、東京、中国、四国ではなく、程

よく実家に近く都会の関西を選びました。中之島を颯爽と歩くヤンエグをイメージし、メンズクラブなんか買っちゃっていましたが、平成11年4月に新入社員として配属されたのは舞鶴火力発電所の新設工事現場でした。日本海側の冬の気候には参りましたね。「弁当忘れても傘忘れるな」と言われる、毎朝どんよりとした鉛色の空模様に気分が滅入りましたよ。仕事は「お前の代わりなんていくらでもいる」「役立たず!」なんてあたりまえ体操、「22時が定時やねん」と先輩に言われ、もちろん「定時」以降も残業の日々。激務で毎朝辞めたいと思っていました。発電所はゼネコンさんメーカーさんが作ってくれ、僕は大林JVが施工してくれる石炭サイロの担当でした。WFやS-UP工法、PS工事は大変勉強になりました。

20代の若い貴重な3年数ヶ月を舞鶴で過ごした後、念願の本店勤務となりました。本店では社有建物の営繕を2年間担当し、その後原子力部門へ異動となりましたが、原子力のプレッシャーに耐えられず逃げるように退職しちゃいました。

松山へ帰り住宅メーカーで現場監督として6年間務めました。現場監督というよりもお客様対応・近隣対応という感じでした。携帯電話でいつでもどこでも呼び出されました。ほんと大変でした。本当に大変でした。マジ大変でした。そして、数千万円の住宅を35年ローンで購入されるお客様の熱量に月給サラリーマンは太刀打ちできず、完了検査でお世話になっていた今の会社へ駆け込み寺のごとく逃げて行きました。

今、僕は憐愛媛建築住宅センターで確認検査員として働いています。ナウい打ち放しからは想像できない業務ですよ。でも、今の会社が最も勤続年数が長く(今年で13年目!）、辞めるつもりもありません。

これを読んで下さっている若い建築士の方々へ。夢に向かって邁進して下さい。でも、夢に躓いたり、理想と現実のギャップに悩んだりしていたら、私といっしょに働いてみませんか?土日祝日休みですよ。残業も少ないですよ。

本文の題名は世代的にミスチルから。二宮工務店の櫻井一博さんから受け継いだ泣きのバトンを、次回は東高バスケット部の後輩であり大学にもついてきやがった、今は弊社を利用して下さる可愛い後輩の仙波完太君へつなぎます。

徒然に

八幡浜支部 原 政治

松山支部長の花岡さんからバトンを受け取りました、八幡浜支部の原です。花岡さんと初めてお話しをさせて頂いたのは、設計監理して頂いた八幡浜市の旧白石和太郎洋館（市指定有形文化財）第2期保存改修工事の完了時でした。当時は八幡浜市と保内町が合併してすぐの頃で、保内町でどのような工事を行っているのかよくわからない時期でしたが、花岡さんが玄関ホール天井画について熱く語られていた事を思い出します。

思えば、私は昭和56年に内子町の町並に関する調査研究で大学を卒業しました。その時は特に歴史文化的な何かに興味があった訳ではなく、故郷の近くにあって価値あるものなら知ってみたいくらいの思いでした。そして八幡浜市の建築技師に採用され、何十年後に日土小学校保存再生工事にも関わる事ができました。

日土小学校の保存再生には、最初は賛成・反対の対立がありなかなか先が見えなかったところ、見えない力で引き寄せられたとしか思えない様に、強い想いを持った人達を中心に段々と輪が大きくなっていき、最終的には世界的な賞に繋がって、重要文化財にも指定されました。念ずれば通じると言われますが、この時ほど納得した事はありませんでした。今でも、最後まで諦めないことが何事にも大事で、運も引き寄せて最終的には大成功につながるものと信じます。

－実は－

私は生まれも育ちも大洲で、県外の大学に行くまで市外で生活したことも有りませんでした。結婚して八幡浜で落ち着きましたが、娘がまた大洲で就職しています。私の母は八幡浜生まれでしたので、大洲と八幡浜を行ったり来たり不思議な縁でつながっている気がします。先程の日土小学校を設計された松村さんも大洲の新谷出身との事で、ここにも縁を感じています。

－ところで－

最近、スマートデバイスでテレビやコンポを操作したり、照明を声で入れたり切ったりして生活しています。「アレクサ。ライト、オン」とか。普段、家の中で少し大きな声を出すことはあまりないので、少しは老化予防になっているかなあと一人満足しています。ちょっと前なら声で電化製品を制御するなんて、それこそSFの世界だった気がします。質問すると、ネットで探して回答してくれるし（私の発音が悪いのか、時々、変な回答もありますが…）、進化するところはすごいところへ行っていますが、でも周りを見直してみると空家問題や限界集落など、夢見た未来からほど遠い現実にも気付かされます。

日々の業務でも空家相談や対策事業に携わっていますが、「アレクサ。〇〇〇」で正解を教えてくださいなあとちょっと思う時もあります。

－さて－

また話が飛びますが、還暦を乗り越してからリターンライダーの仲間入りをしました。20代の時には250ccのオフロードバイクを乗り継いで乗っていて、職場のグループに入れてもらって、近場の鹿児島や高野山位までですが、よくツーリングに行っていました。その頃はナビがあるわけではなく道路地図帳で調べるしかなかったと思いますが、グループの中にスケジュールを立てるのが好きな人が居たので、ついて行くだけで楽だった覚えがあります。今はスマホがあればナビアプリで教えてくれるので、便利な世の中になったなあとと思います。

仕事が忙しくなってバイクを通勤にしか使わなくなった40代の頃、父親が使っていた90ccの古いビジネスバイクに乗り換え、それが壊れると息子が大学の通学用に使っていた原付スクーターを貰って通勤していました。それが、定年が目の前に迫って来ていた2018年、ネットニュースでミラノモーターショーに出展されていた300cc三輪スクーターを見て、これに乗ってみたい！と久しぶりにバイクへの熱が上がりました。それから3年、やっと日本で販売開始となり、すぐ注文しましたが納車まで半年、待ち続けたバイクにまたがりました。しかしながら世の中はコロナ、なかなかツーリングという訳にはいかず、ほぼ通勤のみという状況です。コロナ規制も緩和されそうなので、今春こそはよい旅をと願う今日この頃です。松山さん、渡辺さん、ぜひ一緒をお願いします。

とりとめもないお話にお付き合い頂きましてありがとうございます。

－では－

次回「けんちくの輪」は八幡浜支部の東野さんにバトンをお渡ししたいと思います。よろしくお願いします。



令和5年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 〔建築士会は、まちづくり活動を支援します。〕

公益社団法人愛媛県建築士会は、会員の皆さんが地域の人々と共に行う社会貢献事業や建築士会の内部組織（研究会等）が実施する地域貢献活動としての事業を応援します。

すでに活動をしている方も、これから何か始めようという方も、一定の条件を満たせば事業に助成金を活用することができます。

1. 助成の対象事業の内容

会員が参画する以下のテーマに沿った営利を目的としない地域貢献活動が対象です。

- (1) 地域のまちづくり (2) 景観の保全
- (3) 居住環境の保全・整備
- (4) 自然環境の保全・整備 (5) 福祉環境の整備
- (6) 地域住宅づくり (7) 地域防災づくり
- (8) 歴史的遺産の再生と活用
- (9) その他、地域活性化、社会サービス

2. 助成の対象

- 建築士会会員が参画する地域貢献活動に対する活動助成
- 国、地方公共団体から、建築士会に対しての委託事業、人材派遣に関連して進められる地域貢献活動に対する活動助成
- 地域貢献団体助成事業運営委員会が助成を必要と認めた地域貢献活動に対する活動助成

3. 助成金

- 1件当たり限度額50万円とし、助成率は事業活動費の3分の2とします。
(継続的事業の場合は3年を限度とします)

4. 応募手続き

- ① 助成申請者は

- 申請時に組織内に建築士会会員として継続して在籍が3年以上の者が複数参画している活動団体の代表者

- 建築士会の内部組織（研究会等）の代表者で上記2の助成事業を行おうとする者一

- ② 助成申請書は規定の申請書により申請してください（申請書はHPからダウンロードできます）

<http://www.ehime-shikai.com/other/6734.html>

5. 応募期間

令和5年4月1日～5月31日まで（事前問い合わせは随時受け付けます。）

※応募期間前であっても、仮受付をしますので、お申し出ください。

6. 助成対象事業の決定と助成金交付等について

- 助成対象事業の趣旨に沿った事業かどうかを基準に「愛媛県建築士会地域貢献団体助成事業運営委員会」が審査します。助成額の決定は、申請書受理後60日以内に書面にて通知します。
- 事業の実施期間は、助成額決定日から令和6年3月31日の間に実施される活動を基本とします。
- 助成金は、交付申請者に対して、助成金交付決定通知後の助成金請求に基づき交付します。
- 交付申請者には、活動の内容・助成金の管理・報告書の提出に責任を持っていただきます。

7. 助成事業一覧について（事例）

年 度	事 業 名		助成額	備 考
2017年度	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	10万円	1年目
2018年度	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	2年目
	松山市	女性と防災の会	5万円	1年目
2019年度	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	3年目
	松山市	女性と防災の会	8万円	2年目

提出及び問合せ先：公益社団法人愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町4-1-5 建築士会館2階

TEL：089-945-6100 FAX：089-948-0061 E-mail：lee04603@nifty.ne.jp

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。
(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

「いしづち」の次号の原稿締切日

令和5年 5月号(152号) 令和5年3月30日(木)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。
情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(土会事務局内) 宛
FAX 089-948-0061

編集後記

前号でお話をしたとおり、編集後記で日本の歴史について話して行こうと思います。歴史と言っても歴史の中で私が面白いと思うところだけをピックアップします。

旧石器時代(30,000年前~13,000年前)は、17,000年間続いた時代です。日本旧石器学会によると2010年の集計で旧石器時代の遺跡数は1万150基とされています。一方、朝鮮半島では50基程度にとどまるといえます。これは世界でもいかに日本列島に人口が集中していたかを示していると思います。そして、旧石器時代の遺跡が関東や中部地方で多数発見され、その後の縄文時代(13,000年前~2500年前)も関東から東北、北海道の南部に遺跡が多く、西日本は非常に少なく、東半分は日本の人口の8割が分布していたことになります。

今の気候を考えると、雪が降る東北や北海道に人が住んでいることが不思議に思うのですが、温暖化と言われている現在より、この時代は気温は高く、半地下で地熱を利用したり、土や草木で断熱したり、工夫を行っていたようです。

歴史を知ると温暖化と寒冷化を数万年周期で繰り返していることが分かり、現在の温暖化の原因が二酸化炭素の排出によるものではなく、地球の周期的なものなのかもしれません。

〈いしづち〉2023/3

令和5年3月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061

<http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷有限会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉 花岡 晶子